『紫式部集』における「小少将の君」哀傷歌群

――第六一～六六番歌考――

伊藤　萌
佐藤　あゆみ

はじめに

『紫式部集』には、紫式部が宮仕えしていた時期の和歌の詞書に、幾度も名前があらわれる人物がいる。小少将の君である。彼女は『紫式部日記』にも登場し、宮仕えの憂さを慰め合う、紫式部にとってかけがえのない存在であったようだ。『紫式部集』の第六四番歌から連続する三首は、紫式部が彼女からもらった手紙を見つけて、彼女の死を偲び、ゆかりのあった人物・加賀の少納言と交わした贈答である。紫式部の歌、それに対する加賀の少納言の返歌、両者とも小少将の君の死を偲びながらも、〈人の命の儚さ〉を嘆き合っている。親友の死を通じて、それに気づいた紫式部のやるせない感情が、贈答歌という形で吐露されている。

これらの歌の直前に配置された第六三番歌は、既存の注釈書の多くでは恋愛の歌とされている。これほどにまで切実な〈死〉のテーマの直前に、恋歌が配置されている。それはなぜか。歌そのものだけではなく、家集としての流れを考慮した際に、第六三番歌を恋歌と解釈するのは正しいのであろうか。この疑問が、本稿のテーマである「小少将の君歌群」を

考えたきっかけである。

そのような疑問から、これらの周辺の歌に目を向けると、小少将の君という記述はないが、彼女と詠み交わしたとわかる歌が、第六一番歌に配置されている。また、加賀の少納言とのやりとりの直後である第六七、六八番歌は、生前の小少将の君との贈答歌である。

「小少将の君」に関する歌が、このように家集の特定の部分に集中的に見られるのはなぜか。また、彼女を追慕する歌の直前に、恋歌が配置されるのはなぜか。これら第六一番歌から、おそらく回想歌であろう第六七、六八番歌までは、ただ単にその時々に詠まれた歌なのではなく、一連の流れとして意味があるのではないだろうか。

この一連の歌を、本稿では〈小少将の君〉に関する歌群である可能性を指摘し、第六一番歌から順を追って、調査・考察する。また、そのような歌群が証明されたとき、そこに込められたテーマも考察する。

なお、本書における『紫式部集』本文は、歌番号が漢数字の場合、古本系の最善本とされる陽明文庫本を底本とした山本利達校注〈新潮日本古典集成〉『紫式部日記　紫式部集』による。算用数字の場合は、定家本系の最善本とされる実践女子大学本を底本とする南波浩校注〈岩波文庫〉『紫式部集』による。また、必要に応じて引用する主な注釈書は、次に掲げる通りである。

・竹内美千代『紫式部集評釈　改訂版』（一九六九年九月、改訂版一九七六年三月、桜楓社）。以下、竹内『評釈』と称する。

・南波浩〈岩波文庫〉『紫式部集』（一九七三年一〇月、岩波書店）。以下、南波『文庫』と称する。

・山本利達〈新潮日本古典集成〉『紫式部日記　紫式部集』（一九八〇年二月、新潮社）。以下、山本『集成』と称する。

・木船重昭『紫式部集の解釈と論考』（一九八一年一一月、笠間書院）。以下、木船『解釈と論考』と称する。

・木村正中・鈴木日出男・後藤祥子・小町谷照彦・秋山虔〈紫式部集全歌評釈〉（『國文學』第二七巻一四号　特集「紫式部――源氏物語への回路」特別企画　一九八二年一〇月号、學燈社）。以下、木村／鈴木／後藤『全歌評釈』と称する。
・南波浩『紫式部集全評釈』（一九八三年六月、笠間書院）。以下、南波『全評釈』と称する。
・伊藤博〈新日本古典文学大系〉『紫式部日記（紫式部集）』（一九八九年一一月、岩波書店）。以下、伊藤『新大系』と称する。
・田中新一〈新注和歌文学叢書〉『紫式部集新注』（二〇〇八年四月、青簡社）。以下、田中『新注』と称する。
・清水好子〈岩波新書〉『紫式部』（一九七三年四月、岩波書店）。以下、清水『新書』と称す。

一、第六一番歌考

まず、「小少将の君」哀傷歌群の始まりと仮定する第六一番歌を見る。

土御門院にて、遣水の上なる渡殿の簀子にゐて、高欄におしかかりて見るに

六一　影見てもうきわが涙おちそひてかごとがましき滝の音かな

このように第六一番歌詞書には、「小少将の君」という記述がない。だが、定家本には、詳細な詞書を持つ同一歌が収載されている。第６９番歌とその返歌である第７０番歌を掲げる。

やう〳〵明け行くほどに、渡殿に来て、局の下より出づる水を、高欄ををさへて、しばし見ゐたれば、空の気色春秋の霞にも霧にも劣らぬころほひなり。小少将のすみの格子をうちたたきたれば、放ちてをし下したまへり。もろともに下り居て、ながめゐたり。

６９　影見ても憂きわが涙落ち添ひてかごとがましき滝のをとかな

返し

７０　独り居て涙ぐみける水の面にうき添はるらん影やいづれぞ

古本系（第六一番歌）と定家本系（第６９番歌）のそれぞれの詞書を比較すると、「渡殿」「高欄」「水」などが共通の語句である。そして、何よりも第六一番歌と同一歌である定家本系第６９番歌の詞書には、「小少将」が登場しており、紫式部が小少将の君と共に渡殿の下に流れている水を眺めて歌のやりとりをしたことがわかる。

また、第６９番歌詞書と類似した状況で詠まれた歌が、古本系巻末に掲載されている日記歌の第一一八、一一九番歌として存在するため、それらも確認しておきたい。

五月五日、もろともに眺めあかして、あかうなれば入りぬ。いと長き根を包みてさし出でたまへり。小少将の君

一一八　なべて世のうきになかるるあやめ草今日までかかるねはいかが見る

返し

一一九　なにごととあやめはわかで今日もなほたもとにあまるねこそ絶えせぬ

第６９番歌と日記歌第一一八番歌を比較する。第６９番歌は、「明けゆく」ときに渡殿から下りて詠んだのに対して、第一一八番歌は「あかうなれば入りぬ」と、夜が明けたので局に入ったときの歌である。つまり、第一一八番歌詞書の「五月五日、もろともに眺めあかして」は、第６９番歌の詞書の状況を表し、第６９番歌が詠まれた日（五月五日）の夜明け（五月六日）に第一一八、一一九番歌が詠まれたことがわかる。

したがって、第６９番歌の詞書にある小少将の君と紫式部が「もろともにおりゐて、ながめゐたり」という場面があったことを第一一八番歌の詞書「五月五日、もろともに眺めあかして、あかうなれば入りぬ。」が表していることがわかる。よって、第６９番歌の詞書が示すように、第六一番歌において紫式部が「影見ても……」の歌を詠んだ際、小少将の君が共にいたと考えられる。

以上のことから、第６９番歌詞書を考慮し、第六一番歌は紫式部から小少将の君へ送られた歌と考えることができる。したがって、第六一番歌は「小少将の君」に関連する歌であると認められる。

定家本系第６９番歌「影見ても……」の歌には、小少将の君の返歌（第７０番歌）「ひとりゐて……」の歌が存在するが、古本系では「ひとりゐて……」の歌が収載されていない。

この点については、編者が紫式部の歌ではない小少将の君の歌を配列する必要がないと考え、あえて削除したものと考えておきたい。

二、第六二番歌考

第六二番歌は、直接、小少将の君が関係するとわかる記述がない。しかし、古本系の配列とその詞書から、小少将の君に関連する歌である可能性は捨て切れない。第二章では、そのことを検証する。第六二番歌本文は、以下の通りである。

六二　忘るるはうき世のつねと思ふにも身をやるかたのなきぞわびぬる
　　久しくおとづれぬ人を思ひ出でたるをり

各注釈書では、「久しくおとづれぬ人」をどのように解釈しているだろうか。すると〈紫式部と恋愛関係にあった人物〉と〈恋愛関係にはなかった人物〉の大きく二つの解釈に分かれることがわかる。以下、各注釈書の該当部分を抜き出した。

①恋愛関係にあった人物

・竹内『評釈』

相手は宣孝か、彼以外の人か。「思ひいでたる折」という程、久しく訪れぬとは夫と呼べる相手ではなかろう。宮仕え当時、「ほの語らひける人」があったが、宮仕え以後遠ざかってしまった人ではなかろうか。彼女は思慕の情をよせていたが絶えた人（以下略）。

・山本『集成』

夫宣孝であろう。

・南波『全評釈』

相手がどういう人なのか、不明である。だから女友達とも恋人ともとれそうである。しかし、「身をやる方のなきぞわびぬる」という表現は、女友達とか、ただの知人とするには強烈すぎる。やはり、夫と見るべきであろう。（略）その相手はやはり宣孝であろう。

②恋愛関係にはなかった人物

・木船『解釈と論考』

紫式部自身が、たいして心にもとめず、久しく忘れていたのだが、折りあって、思い出した《人》なのだから、その《人》は、夫宣孝ではむろんなく、また特別の交渉のあった男性でもない、と解するのが、穏当のはずである。

・木村／鈴木／後藤『全歌評釈』

「思ひ出でたる」にかなり親しかったはずの友人を、はっと思い出した紫式部の心情の揺れが表出されているようにも思われる。

・伊藤『新大系』

宮仕え後疎遠になった旧友の誰かと思われる。

・田中『新注』

心移ろう異性の恋人よりも、今は心ならずも疎遠な旧知の心友の方が、歌の内実に相応しい。

木船氏が述べるように、詞書の「久しくおとづれぬ人を思ひ出でたるをり」から、久しく忘れていた人物をふっと思い出したことがわかる。南波氏が述べるような「久しくおとづれぬ人」が、宣孝などの恋愛関係にあった人物であったとす

るなら、しばらく音沙汰のない男の存在を忘れることがあるのだろうか。もし恋愛関係にあった人物に自らを忘れられたことを辛く思う歌だとしたら、もっと切実に自らの所へ訪れてほしいと訴える内容が詠まれたのではないか。当時は、経済的支援者でもある男の訪問が、女の生活に大きく関わっていたはずである。男からの音沙汰が途絶えたからといってその存在を忘れる女はいるだろうか。したがって、平安時代の恋愛のスタイルを考慮しても、「久しくおとづれぬ人」を男と捉えることは難しい。

また「『身をやる方のなきぞわびぬる』という表現は、女友達とか、ただの知人とするには強烈すぎる」と南波氏は解釈しているが、果たしてそうだろうか。第六二番歌と同様に「身をやるかた」を歌に詠み込むものが、古本系『紫式部集』巻末歌である第一一四番歌に存在するため、その贈答歌を確認する。

初雪降りたる夕暮れに、人の

一一二　恋しくてありふるほどの初雪は消えぬるかとぞうたがはれける

返し

一一三　ふればかくうさのみまさる世を知らで荒れたる庭に積る初雪

一一四　いづくとも身をやるかたの知られねばうしと見つつもながらふるかな

第六二番歌と第一一四番歌、どちらも「身をやる方がない、そのことが辛い、悲しい」と述べている点で共通している。第一一三番歌と第一一四番歌に対して、「初雪にことよせて尋ねてくれた友人へ、二首の返歌をしたのであろう。[1]」と通説

で解釈しているように、第一一四番歌は、恋歌ではないと考えられよう。第一一四番歌が恋歌ではないように、第六二番歌も恋歌の範疇に無理に押し込めなくともよいのではないか。

以上のことから、「久しくおとづれぬ人」は紫式部と恋愛関係ではなかった人物と解釈することができる。恋愛関係ではなかった人物とされている、親しかったはずの友人、疎遠な旧知の心友とする解釈は、どちらもこの時点では否定できないため、どちらの解釈をとるかについては、後述する調査と考察の後に述べる。

次に「久しくおとづれぬ人」とは、どのような人物であるか。まずは、「おとづれ」の辞書的意味を確認する。[2]

おとづれ【訪れ】

《音連レの意。相手に声を絶やさずにかける、手紙を絶やさずに出す意が原義。》

❶（いつも）相手を訪ねる。

❷音信する。手紙を出す。

❸声をかける。音を聞かせる。

「久しくおとづれぬ人」とは、「しばらく訪問してこない人」「しばらく手紙を遣わしてこない人」と二通りの意味がとれるため、この詞書と歌からは、どちらの意味で「おとづれ」が記されているのかわからない。だが、第六二番歌の近くに配列されている第六四番歌詞書に、小少将の君と紫式部が手紙のやりとりをしていたことが明確に記されている。

小少将の君の書きたまへりしうちとけ文の物の中なるを見つけて、加賀の少納言のもとに

六四　暮れぬ間の身をば思はで人の世のあはれを知るぞかつはかなしき

この歌の詞書にあるように、小少将の君が書いたうちとけ文を紫式部が物の中から見つけたことがわかる。つまり、紫式部は手紙を小少将の君からもらっていたのである。この「うちとけ文」の辞書的意味は、「内輪同士の、気を許して書いた手紙[3]。」である。

また、「うちとけ文」は、『源氏物語』の「浮舟」巻にもあらわれる。「見ぐるしう、何かは、その女どちの中に書き通はしたらむうちとけ文をば御覧ぜむ[4]。」とあった。中君と薫が手紙をやりとりしているのではないかと疑った匂宮が、本来は宇治の女が中君に仕える侍女に宛てた手紙であったのに、その手紙を開けて読もうとしたため、それを中君が止めようとする場面である。

「どち」とは、接尾語で「それと同類の者の意を添える。……同士[5]」という意味であるから、女同士が書き通わした手紙は「うちとけ文」といえることがわかる。よって、小少将の君と紫式部の文のやりとりも「うちとけ文」といえるのである。

小少将の君と紫式部が手紙のやりとりをしていたことは、『紫式部集』内だけでなく、『紫式部日記[6]』にも確認できる。

小少将の君の、文おこせたまへる返りごと書くに、時雨のさとかきくらせば、使もいそぐ。「また空のけしきもうちさわぎてなむ」とて、腰折れたることや書きまぜたりけむ。暗うなりにたるに、たちかへり、いたうかすめたる濃染紙に、

雲間なくながむる空もかきくらしいかにしのぶる時雨なるらむ

書きつらむこともおぼえず、

ことわりの時雨の空は雲間あれどながむる袖ぞかわくまもなき

小少将の君から送られてきた文の返しを紫式部が書いた場面で、会えないということをお互いに悲しんでいる歌である。

これらの『紫式部集』『紫式部日記』の記述から、紫式部と小少将の君が手紙をやりとりするような仲であったことが明確になる。

以上のことから、次のことが導き出せる。

・詞書や歌の内容から恋愛に関する歌とは言い切れないこと。

・「久しくおとづれぬ人」は、友人である可能性があること。

・手紙をやりとりしていた人物とも考えられること。

・小少将の君と紫式部は度々手紙のやりとりをしていたこと。

これらを総合するに、「久しくおとづれぬ人」は、小少将の君である可能性が十分に濃厚なのであり、本稿では、第六二番歌詞書の「久しくおとづれぬ人」を、小少将の君であると考えることとする。

三、第六三番歌考

1、第六三番歌は欠落した歌の返歌であるか

次に第六三番歌について考えたい。この歌の解釈は、第六一番歌から始まると仮定した「小少将の君」歌群の証明にあたって、非常に重要となる。しかし、第六十二番歌の次行は「返し　やれてなし」とあり、第六十三番歌の詞書も記載がない。第六二番歌の返歌と第六三番歌の詞書の部分が、陽明文庫本以前のいずれかの段階で破れて失われてしまっており、詠作事情が不明なのである。また、つづく第六四番歌から第六六番歌は、紫式部が小少将の君を追慕し、彼女とゆかりのある加賀の少納言に贈った歌とその返歌がつづく。したがって第六三番歌を正しく解釈するには、周囲の歌との関係性を

整理し、それをもとに歌に詠み込まれた語句に注目していく必要がある。

まず、本稿「一」・「二」で考察した、第六一番歌・第六二番歌の歌について確認する。第六一番歌は、紫式部が土御門院で小少将の君と詠み交わした歌である。つづく第六二番歌は、小少将の君とのやりとりが途絶えたこと、さらにそれを片時でも忘れてしまった自分を悲しく思って詠んだ歌だとわかる。この二首の解釈から、紫式部と小少将の君の距離に変化が生じていることがわかる。

また、第六四番歌からの三首は、小少将の君とやりとりした文を見つけたことから、彼女の死を偲び、加賀の少納言と人の世の儚さを嘆き合う歌である。

以上、前後の歌を十分に考慮した上で、第六三番歌を確認する。

六三　たが里も訪ひもや来るとほととぎす心のかぎり待ちぞわびにし

この歌に関して、まず木村／鈴木／後藤『全歌評釈』における小町谷照彦氏の注釈を参照したい。

贈歌とその詞書が脱落しているので詠作の事情は明らかではないが、歌の内容からして宣孝への返歌と考えてよいだろう（『文庫』『新書』）。「時鳥汝が鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」（古今集・夏、よみ人しらず）、「誰が里に夜離れをしてか時鳥ただここにしも寝たる声する」（同・恋四、よみ人しらず）などの例に見られるように、時鳥には多情な印象がある。夜離れがちな宣孝を時鳥によそえて、待たされた恨みをこめて揶揄的に応酬したものであって、宣孝との楽しき日々の記念の一つといえよう。さして深刻なものではあるまい。

小町谷氏は、南波『文庫』や、清水『新書』にあるように、歌の内容から宣孝への返歌だと推測している。つまり、第六三番歌は破れてなくなってしまった贈歌への返歌であり、「ほととぎす」を多情な男の比喩だと捉えて、恋愛の歌としている。同じく第六三番歌を返歌として解釈を進める南波『全評釈』に注目する。

人里へ下りてくる以上、誰それの里へなどと、特に区別せず、誰の家へも尋ねきてくれるものと思って待ちわびていたのに――というのが表意であるが、これが「返し」であるとすると、人事にかかわる歌となり、表意のままのものではなくなり、「ほととぎす」は、里から里へと女を訪ねあるく男の意になり、その男の訪れを待ちわびていたのに、遂に来なかった男への閨怨歌となる。

紫式部の歌は、あまりあらわに生の感情を表さないものが多いが、この歌はかなりあらわに女の感情をあらわしている。そのような相手は、紫式部の生涯においては夫宣孝以外には、ほとんど見られない。やはり、宣孝への返歌と思われる。

南波氏も小町谷氏と同様に、第六三番歌を欠落した贈歌に対する返歌として解釈をしている。ここで留意すべきは、定家本系と古本系でこの一首の扱い方が異なるということだ。それぞれの底本におけるこの歌の前後を確認する。

〈古本系〉

久しくおとづれぬ人を思ひ出でたるをり

六二　忘るるはうき世のつねと思ふにも身をやるかたのなきぞわびぬる

返し　やれてなし

六三　たが里も訪ひもや来るとほととぎす心のかぎり待ちぞわびにし

〈定家本系〉

７９　忘るるは憂き世の常と思ふにも身をやる方のなきぞわびぬる

久しくおとづれぬ人を、思ひ出でたるをり

（四行空白）

返し

８０　誰が里も訪ひもや来るとほととぎす心のかぎり待ちぞわびにし

古本系では第六二番歌の返しが欠落していると読めるが、定家本系では四行の空白があり、第８０番歌の前に「返し」との詞書がある。先に挙げた注釈書が、第六三番歌を返歌であることを意識して解釈していたのは、この詞書によるものであった。

両系統の第六三番歌周辺に差異が認められたところで、次に定家本の〈四行空白〉に注目したい。今井源衛氏の解釈[7]を確認する。

また71（六二）「わする、はうき世のつねと」と72（六三）「たか里もとひもやくると」の贈答歌は歌意上納得しにくいものであるが、二類本では、とくに御所本に、贈歌（六二）の次ぎに

返し　やれてなし

（一行空白）

かへし　イ無

と記され、また陽明本でも

返し　やれてなし

と記して、それぞれ答歌（六三）に移っている。（略）この個所に、古くは少なくとも「わすらるゝ」に対する返歌一首と「たか里」に対する贈歌一首とがあり、それは両本分岐以前に損傷を受けて脱落したのである、（以下略）。

今井氏は、第六二番歌の返歌と、第六三番歌（72）に対する贈歌が欠けていることを指摘し、それは定家本系・古本系両系統が分岐するより以前に損傷を受けていたからであると述べている。また同様に、木船重昭氏は『解釈と論考』において、損傷箇所について考察し、第六三番歌とその直前の「忘るるは……」の歌両者の解釈を次の通り提示している。

79番歌は、その詞書から推測すると、夫でも特別な関係にあった男性でもないその《人》に、わざわざ贈った歌とも思えない。本来、独詠歌で、親本はその部分が損じてはいても、そこに返歌はなかったのであろう。諸伝本のこの部分の状態から推して、定家自筆本古本両系統の親本あるいは、それ以前の祖本に、はやく損傷を生じていたために、詞書に混乱を来したものと思われる。したがって、80番の詞書《返し》も疑わしく、80番歌もまた、独詠歌であろう。なぜなら、《たが里もとひもや来る》のその《もや》からうかがえるとおり、80番歌は不確実なことを危惧し

つつ期待する歌であり、しかも、《たが里も》と言うのは、すべての里の中の一つとして、わが里をも《ほととぎす》が訪い来るのを期待するに過ぎず、特定の男性に対してその来訪を期待して詠んだとするには、極めて皮肉な返歌で、しかも、それにしてはあまりにも切実な実感がこもった歌だからである。

木船氏も〈四行空白〉箇所は、諸本が系統に分かれる以前に損傷していたことを指摘している。また、それぞれの欠損が早くからあったことから、第六三番歌とその前の「忘るるは……」歌の両歌とも独詠だとしている。木船氏の指摘の通りであるならば、先に挙げた注釈書の「第六三番歌は欠落した歌の返歌である」という条件は崩れる。そうなると、この歌の解釈は大きく変わってくるのではないだろうか。

家集を編纂する過程で、紫式部もしくは他の編者によって意図的に歌が排除された可能性も考えられる。つまり、早くから贈答歌としてではなく、独詠歌としての解釈を読者に委ねたのではないだろうか。第六三番歌が独詠歌であるか否かは、他の観点から考察したのちに、解答を出すことにする。

2、〈ほととぎす〉の効果

第1節で第六三番歌の既存の解釈と、その問題点が明らかになった。本節では、歌に用いられる語句に注目したい。重要な語句として、第一章で挙げた注釈書にも記述が見られた〈ほととぎす〉の意味を確認する[8]。

ほととぎす【時鳥・杜鵑・霍公鳥】

《鳴声による名か。スはウグイス・カラスなどのスに同じく鳥をあらわす語》

①鳥の名。初夏に鳴き、その声が人の叫びのように感じられ、人の恋しさを誘う。古来、冥府の鳥とされ、橘・蓬・

菖蒲など、不老不死伝説・復活伝説に於ける生命の木や草と関係して使われることが多い。死出の田長。

②〔枕詞〕「飛び」にかかる。

鳴き声が、人の物思いや懐旧の情をかきたてる、ともされる。また、場所を定めず鳴く点で多情の鳥ともされる。あるいは、鳴き声から「シデノタヲサ」と呼ばれる異名が、「死出の田長」と解されるところから、冥土の死出の山を出て田植えを勧めるべくやってくる鳥とも思われた。その死のイメージと懐旧の念とが重なって、死者を思う気持ちをも引き出す。

〈ほととぎす〉は、冥土から飛来する鳥であり、また、場所を定めないで鳴くという性質から、多情な鳥とされることがわかる。次に、当時の和歌における〈ほととぎす〉の使われ方を確認する。平安時代後期に藤原清輔が編纂した歌学書『奥義抄』[9]には、以下の記述がある。

問云、ほとゝぎすはしでの山をすぐる鳥なれば、人などにおくれて世中なげかしく思ひける時よめる歌にや。我世中にすみわびにたりといへよとよめるにこそ。集にも、

なき人のやどにかよはゞほとゝぎすかけてねにのみなくとつげなむ

などはべり。又

しでの山こえてきつらむほとゝぎす戀しき人のうへかたらなむ

などもよみたり。萬葉には、

やまとにはなきてきつらむほとゝぎすながなくごとに人ぞおもほゆ

かやうによめる心にや。

答云、是義も故なきにあらず。題しらぬ歌にて侍るぞあやしき。

但、古集共には故ある歌もことはからぬ多かり。

『奥義抄』にも同様に、〈ほととぎす〉は死後の世界から飛来する鳥であると記述がなされている。また、大切な人に先立たれて世の中の無常を嘆く場面で詠み込むという可能性も指摘されている。その場合、〈ほととぎす〉は、今は亡き人を思い起こさせる鳥であり、また、死後の世界（冥界）での亡き人について語ってほしいといった切なる願いを感じさせる鳥でもある。

『奥義抄』の用例として挙げられている、伊勢の和歌にあらためて注目したい。この和歌は、『拾遺和歌集』[10]に収載されている。

生み奉りたりける親王の亡くなりての又の年、郭公を聞きて　伊勢

一三〇七　しでの山こえてきつらむほとゝぎす戀しき人のうへかたらなむ

▽冥土から飛来するという時鳥に、亡き人について語ってほしいと求めたもの。

伊勢の歌では、〈ほととぎす〉は現世と冥土を行き来する鳥として詠まれたことがわかる。さらには、〈ほととぎす〉は冥土に渡った人（亡き人）について、現世の人に語るという役割も確認することができる。

以上の辞書・辞典・和歌の記述から〈ほととぎす〉は、次のような特性を持つ鳥であると整理することができる。

①現世と冥界を行き来する。

②場所を定めずに鳴くという点から、多情な鳥とされる。

③鳴き声には、自然と亡き人を思い起こさせ、死後の世界での様子をも語る。

第1節で挙げた注釈書で指摘があった〈多情の鳥〉というイメージもあるが、現世と冥土を行き来する鳥だということもここで確認しておきたい。

では、紫式部の作品に登場する〈ほととぎす〉は、どのような場面で、どのような意味（効果）を持たせるよう使用されているのであろうか。

まず、第六三番歌と同じく『紫式部集』に収載された歌に、〈ほととぎす〉を詠んでいるものがある。

賀茂にまうでたるに、「ほととぎす鳴かなむ」といふあけぼのに、片岡の木ずゑをかしう見えけり

一三　ほととぎす声まつほどは片岡の森のしづくに立ちやぬれまし

この歌からは、紫式部が賀茂に出かけた際に、初夏の自然に心を躍らせた様子がうかがえる。賀茂はほととぎすの名所であり、この場面における〈ほととぎす〉は、多情な男の比喩でもなく、また、冥土から飛来するという要素も持たないと考えるのが自然である。同じ〈ほととぎす〉が詠み込まれているが、第六三番歌の既存の解釈のような恋歌ではなく、季節の歌だといえよう。

また、『源氏物語』の「幻」巻[11]にも〈ほととぎす〉を詠んだ歌がある。

亡き人をしのぶるよひのむら雨にぬれてや来つる山ほとゝぎす

これは源氏が亡くなった紫の上を偲んで、雨の中飛んできた山ほととぎすを、死後の世界からの使いにみなして詠んだ歌である。したがって第六三番歌は、季節の歌ではなく、さらに多情な男を詠んだ歌ともいえない。

以上、紫式部による〈ほととぎす〉の和歌のうち二首を確認したが、〈ほととぎす〉という語句が多情な男以外の要素として用いられることが十分あったと考えることができる。

3、「小少将の君」歌群における第六三番歌の意図

これまで、第六三番歌が独詠歌であるか否か、さらにそこから生まれる既存の解釈に対する疑問を提示して論を進めてきた。その中で、〈ほととぎす〉という語句に新たな要素を見出すことができた。しかし、そのような要素がこの歌に認められるだろうか。先の章で整理した内容を踏まえつつ、この歌の前後の和歌の歌群的役割を確認する。

まず、第六一番歌は、紫式部と小少将の君が共に宮仕えしていた時期に詠んだ歌であり、彼女らが互いに身の憂さを慰め合っていたことがわかる。しかし、つづく第六二番歌は、これを小少将の君に関連する歌とするなら、小少将の君が「久しくおとづれぬ人」となり、彼女との親交が途絶えつつあることがうかがえる。その直後に損傷箇所があり、第六三番歌がある。そして、つづく第六四番歌から第六六番歌は、以下の通りである。

小少将の君の書きたまへりしうちとけ文の物の中なるを見つけて、加賀の少納言のもとに

六四　暮れぬ間の身をば思はで人の世のあはれを知るぞかつはかなしき

六五　たれか世にながらへて見む書きとめし跡は消えせぬ形見なれども

返し

六六　亡き人をしのぶることもいつまでぞ今日のあはれは明日のわが身を

第六四番歌の詞書に、紫式部がその文を見つけたことをきっかけに、彼女の死を偲び、ゆかりのあった加賀の少納言に文を送ったとある。また、紫式部による贈歌二首と加賀の少納言による返歌には、小少将の君の死を偲ぶ気持ちと同時に、人の世の儚さに気づかされ、わが身にもいつ訪れるかわからない終わりがあることを嘆く気持ちが読み取れる。

つまり、第六三番歌の前後に配置されたこれら三首によって、小少将の君の死が確実なものとなっている。第六二番歌では、小少将の君と距離ができてしまったことしかわからないのに対し、第六四番歌からの三首では、明確に彼女の死を認めることができるのだ。

以上の歌の配列を意識すると、第六三番歌の〈ほととぎす〉に〈冥土から飛来する鳥〉という要素を認めることができるのではないか。その場合、本稿で証明を試みた「小少将の君」歌群は、彼女の出仕時期から始まり彼女の死後にわたる一連の流れが見出せるのである。

これら「小少将の君」歌群のテーマは最終章で提示するとして、第六三番歌は、紫式部が冥土にいる小少将の君について、〈ほととぎす〉に語ってほしいという切実な願いが詠まれた歌であると、解釈できるのではないか。既存の注釈書は、第六三番歌を返歌とした上で解釈を行っていたが、早くから欠けていた内容不明な歌を仮定した解釈より、収載された歌、

特にここでは歌群を意識して歌そのものを解釈したほうが自然であるといえよう。したがって、第六三番歌を独詠歌として定位しておきたい。

四、小少将の君歌群のテーマ

第六一番歌から第六六番歌までを、「小少将の君」という一人の人物に関する連続した歌群ではないかという仮説を展開してきた。歌群の各歌の役割については、第三章で記述した通りである。ここでは、歌群における疑問点をもう一度考察することによって、歌群のテーマを導き出したい。

まず、第六一番歌の返歌が古本系では省略されている点である。この歌は定家本では第６９番歌にあたり、そこから第７５番歌まで、紫式部と小少将の君が詠み交わした歌が配列されている。これも歌群と呼べるのではないだろうか、という指摘がなされるかもしれない。もちろん特定の人物についての歌が連続して配置されているという点では、十分歌群と呼べるであろう。しかし、本稿で証明した古本系における〈小少将の君の歌群〉は、それとは別のテーマ性を含んでいるのではないだろうか。

定家本系における歌群のテーマが〈宮仕え時代の親友・小少将の君とのやりとり〉だったならば、古本系の歌群のテーマは〈小少将の君哀傷〉である。本稿で研究を進めてきた「小少将の君」哀傷歌群は、小少将の君との親交が主ではないのである。注目すべき点は、紫式部自身の心情変化である。第六二番歌では「わびぬる」、第六三番歌では「わびにし」という強い感傷表現が使われている。前者は、かつて親友であった小少将の君の存在でさえ、忘れてしまう自分の身の悲しさを、つづく歌では、冥土から飛来し亡き人について語ってくれるであろうほととぎすが、自分のもとに来なかった辛さを詠んでいる。さらに、第六四番歌では、いつ終わるかわからない自分の身さえ知らないのに、人の命の儚さを知ってし

まうことを「かなしき」ことと詠んでいる。以上、「小少将の君」哀傷歌群に配置された歌には紫式部の心情が詠まれており、〈小少将の君哀傷〉という第一の主題とともに、〈わが身の儚さを知った悲しみ〉という第二の主題が存在すると考えることができよう。

この結論から、別の疑問点も解決することができる。それは、第六三番歌の前にある欠損箇所の内容である。早くから欠損していたという点から、独詠の可能性を支持して第六三番歌は解釈したが、もし歌があったとしても意図的に省略されたのであろう。なぜなら、複数の歌に渡って自身の感情を歌によって表現しようとする際、他者による歌が間に存在していたならば、紫式部自身の感情表現が弱められてしまう可能性が考えられるからである。それを避けて、歌本来の意味を歌群に反映するためにも、紫式部自身によってあえて省略されたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、第六三番歌の新解釈を中心に、「小少将の君」哀傷歌群の存在証明を試みた。そのため、歌そのものだけではなく、家集における流れを考慮した。そこから見えてきたものは、作者・紫式部が小少将の君との親交を通じて自らを振り返るという、彼女の〈自己を見つめる第三者的な視点〉である。親友の死を個人的な出来事としてだけではなく、和歌という作品に書き起こすことで客体化し、そこから〈人の命の儚さ〉という誰にでも共通するテーマ性を含んだ歌群へと発展させた。その点に、彼女の作家性を認めることができよう。『紫式部集』の「小少将の君」哀傷歌群では、紫式部の人間性と共に、作家としての姿勢もうかがうことができるのではないか。本稿では、その可能性を指摘した。

（注）

（1）山本利達校注〈新潮日本古典集成〉『紫式部日記　紫式部集』（一九八〇年二月、新潮社）
（2）大野晋ほか編『岩波古語辞典　補訂版』（一九九〇年二月、岩波書店）
（3）注2に同じ。
（4）柳井滋ほか校注〈新日本古典文学大系〉『源氏物語　五』（一九九七年三月、岩波書店）
（5）注2に同じ。
（6）注1に同じ。
（7）今井源衛「紫式部集の復元とその恋愛歌」『文学』第三三巻二号（一九六五年二月、岩波書店）
（8）前半、注2に同じ。後半、山口秋穂・鈴木日出男編『王朝文化辞典―万葉から江戸まで―』（二〇〇八年一一月、朝倉書店）
（9）佐佐木信綱編『日本歌学大系』第壱巻（一九五七年三月、風間書房）
（10）小町谷照彦校注〈新日本古典文学大系〉『拾遺和歌集』（一九九〇年一月、岩波書店）
（11）柳井滋ほか校注〈新日本古典文学大系〉『源氏物語　四』（一九九五年三月、岩波書店）

本稿を記すにあたって、注に掲載した文献以外に、次に掲げる文献も参考にした。

・萩谷朴『紫式部日記全注釈　上巻』（一九七一年一一月、角川書店）
・南波浩『紫式部集の研究　校異篇　伝本研究篇』（一九七二年九月、笠間書院）
・久保木寿子「紫式部集の増補について（上）」『国文学研究』第六一集（一九七七年三月、早稲田大学国文学会）
・久保朝孝「古本系『紫式部集』巻末付載「日記歌」考」（今井卓爾古稀記念論集編集委員会編『今井卓爾博士古稀記念　物語・日記文学とその周辺』一九八〇年九月、桜楓社）
・中周子校注〈和歌文学大系〉『紫式部集』（二〇〇〇年四月、明治書院）
・久保田孝夫ほか編『紫式部集大成　実践女子大学本・瑞光寺本・陽明文庫本』（二〇〇八年五月、笠間書院）

・久保朝孝『古典解釈の愉悦：平安朝文学論攷』（二〇一一年一月、世界思想社）
・久保田淳『新古今和歌集全注釈一』（二〇一一年一〇月、角川学芸出版）
・久保田淳『新古今和歌集全注釈三』（二〇一一年一二月、角川学芸出版）

（国文学科三年生）